

瀬戸内寂聴

わたしの源氏物語



わ

107363

瀬戸内寂聴

江苏工业学院图书馆
藏书章

わたしの源氏物語げんじものがたり

一九八九年七月一〇日初版第一刷発行
一九八九年九月一〇日初版第二刷発行

著者 瀬戸内寂聴

発行者 相賀徹夫

発行所 小学館

東京都千代田区一ツ橋二―三―一 (〒101-01)

電話 編集 〇三―二三〇―五一二三

業務 〇三―二三〇―五三三三

販売 〇三―二三〇―五七三九

振替 東京八―二〇〇番

印刷所 図書印刷

●造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。

●本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害になりますので、その場合はあらかじめ、小社あて許諾をお求めください。

わたしの源氏物語 目次

出逢い	9	政略結婚	61
桐壺いじめ	13	正妻のプライド	65
初恋のひと藤壺	17	ロリータ趣味	69
雨夜の品定め	21	若 紫	73
女さまさま	25	末摘花	77
不良少年の自信	29	貧しい貴族	81
不倫妻	33	聡明な女の心の鬼	85
夕顔の宿	37	春の夜の誘惑	89
可愛い女が永遠の女	41	花宴の再会	93
紫式部の顔	45	老女のコケットリー	97
紫式部のM的要素	49	とんだ恋の鞘当て	101
女はやはらかきがよし	53	六条御息所の性格の悲劇	105
コキユのあわれ	57	車争い	109

物の怪と加持祈禱	113	明石の乙女	165
芥子の匂い	117	返り咲く人々	169
女君さらに起きたまはぬ朝	121	明石上の強い運	173
新枕の陶醉	125	末摘花の純真と鷹揚	177
野宮の別れ	129	六条御息所の遺言	181
運命のかげり	133	逢坂の関のめぐり逢い	185
のがれられぬ黒髪の子	137	空蟬出家	189
藤壺出家	141	前斎宮入内の闇取引	193
怪しの男帯	145	朱雀院失恋	197
不良娘の父親の嘆き	149	明石上洛	201
ユルスナールの花散里	153	妻と愛人の間	205
源氏物語の生活	157	子別れの冬	209
須磨の配所	161	春の愁い	213

出生の秘密ついに露頭	217	小説のいのち	269
息子の嫁を口説く父親	221	近江の君の不幸	273
朝顔の斎院のプライド	225	野分の朝の覗き見	277
親のふり見て	229	行幸見物	281
男の夢のハレム六条院	233	鳶に油揚げ、玉鬘の結婚	285
夕顔の忘れ形見	237	離婚の悲劇	289
玉鬘シンデレラ物語	241	色事師の色の戒め	293
危険な関係	245	不幸の足音	297
初春衣裳選び	249	夜離れの古女房	301
養父の横恋慕	253	朝帰りの夫の迎え方	305
螢の光で見る女	257	焼けぼっくいに火が	309
性ぬきの夫婦愛	261	六条院の栄華の極み	313
紫式部の小説観	265	明石の入道の退場	317

猫のひきあげた御簾の奥に	321	女三の宮の決断	365
身代わり猫	325	真面目亭主の恋	369
この世は かばかりと	329	父親の好色を反面教師として	373
女楽花見立て	333	秋好中宮の悲しみ	377
紫上発病	337	恋下手な夫の朝帰り	381
夫のいぬ間の不倫	341	夫の浮気による家庭の危機	385
密通の後	345	浮気の方方	389
紫上の死と蘇生	349	恩讐の彼方に	393
コキユの嘆き	353	紫上の死	397
朧月夜の出家	357	残された夫	401
悲恋に殉じた貴公子の哀切	361	光消えはてようとして	405

寂庵対談 ゲスト 大庭みな子

紫式部の眼……………409

参考・源氏物語系図／寝殿造復原図／六条院復原図……………427

装幀／横尾忠則

わたしの源氏物語

出^で逢^あい

はじめて源氏物語を読んだ日を、わたしはなぜかはっきり記憶している。

今から半世紀も昔のこと、晩春の雨の土曜日の午後だった。昭和十年（一九三五）、わたしは十三歳で、その春、徳島県立の女学校に入ったばかりの一年生だった。入学してすぐ陸上部に入れられたので、毎日放課後は日が暮れるまで、練習があったが、その日は雨なので、練習がなかった。真っ直ぐ家へ帰る気にもなれず、体育館の隣に建っている図書館に入ってしまった。そこでは生徒が自由に書庫の棚の本を取り出して選び、それから借り出しの手続きをして、階上の閲覧室で読むという規則になっていた。

わたしは書庫に入り、棚の本の背文字を眺めていった。壁ぎわから二列めの本棚の上から三段目に、その本があった。

「源氏物語 与謝野晶子^{よさのあきこ}訳」という文字が、わたしの目を引きよせた。与謝野晶子の明星派の歌に、その頃のわたしは魅せられていた。わたしはその本を抜きだし、階上に行った。閲覧室には、四、五人しか生徒はいず、静寂がみちていた。窓ぎわに席をとり、雨空を見上げてから、わたしは厚い本を開いた。

「どの天皇様の御代であったか、女御^{にようご}とか更衣^{こうい}とかいわれる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族

出身ではないが深い御愛寵^{あいちょう}を得ている人があった。……」

読みやすい歯切れのいい文章に案内され、わたしは一気に源氏物語の世界に引きこまれていった。「もう時間ですよ」

と、声をかけられた時は、生徒は誰もいなくなっていた。本の館外貸出しは禁止されている。それ以後、わたしは与謝野源氏を買いもとめ、学校にいる以外のすべての時間をあてて、熱狂的に読み終えた。

世の中にこんな面白い小説があるかと思った。すでに文学少女だったわたしは、岩波文庫などで、外国の小説も読みあさっていたが、トルストイやフローベルにも紫式部は負けないと感嘆した。紫式部が源氏物語を書いていた平安の昔、受領菅原孝標^{すけりょうすがわらのたかすえ}の娘として生まれた文学少女がいた。後の更級日記^{さらしな}の作者だが、彼女が憧れの源氏物語をおばさんから貰い、几帳^{きちょう}のかげにひきこもって、一冊ずつ櫃^{ひつ}から取りだし、読みふけり、その嬉しさを、

「後の位^{きさき}も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯^ひを近くともして、これを見るよりほかのことなければ……」

と、大感激したのも、やはり十三歳の時であった。もちろん、彼女が読んだのは、源氏物語の原文であり、紫式部が書いたものを、書き写した写本である。印刷術のなかった当時は、そうしてすべての物語は書き写されていた。写経にも写経生という専門家がいたように、物語を写すのにも、当時はプロがいて、その製本も様々に意匠を凝らす製本屋のプロがいたのではないだろうか。

小説にうつつを抜かして、夜も昼もなく読みふけるなどということは、若い時代の特権かもしれない。

ない。

谷崎潤一郎たにざきじゆんいちろう訳の『源氏物語』が、中央公論社から刊行されはじめたのは、それから四年後の昭和十四年一月からであった。緑色の和紙の表紙の和綴じのその本を注文し、毎月本屋から届くのを楽しみにしていた。この訳も「である調」だったが、それでも与謝野訳よりは、ずっとなだらかで原文に近い長いセンテンスがやわらかかった。これは戦後に新訳がされて「ございます調」に変わり、いっそう原文の感じに近くなった。

「何みかどという帝の御代のことでしたか、女御や更衣が大勢伺候していました中に、たいして重い身分ではなくて、誰よりも時めいている方がありました。……」

という形になっている。

それから更に三十三年たって、円地文子えんちふみこ訳『源氏物語』が、新潮社から刊行されはじめた。その書きだしは、

「いつの御代のことであつたか、女御更衣たちが数多く御所にあがっていられる中に、さして高貴な身分というではなくて、帝の御寵愛を一身に鍾あつめているひとがあつた。……」
となっている。

「いづれの御時おほむときにか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中なかに、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。……」

という原文でも、訳者によって、このように三様になってくる。三人の訳者が、それぞれわが国

の近代文学史上での大家と呼ばれる人々であるのを見ても、源氏物語は、都に遠い東国の受領の娘や、四国の片田舎の女学生の心を捕らえるだけでなく、文豪と呼ばれるような大作家の心まで魅了しつくして、その大切な人生の何年かを虜にし、現代語訳に打ちこますのだから恐ろしい魔力を持っているといわねばならない。

特に円地源氏の誕生にあたっては、仕事場が同じアパートになったという偶然から、わたしはその悪阻から難産まで、ごく間近にいてつぶさにつきあうという因縁を持ってしまったので、源氏物語の持つ恐ろしいまでの魅力も魔力も、いやというほど見せつけられてしまった。

円地さんは、与謝野、谷崎におとらず、源氏物語に早くから心酔していられたが、訳にとりかかれたのは昭和四十二年からで、六十二歳になられていた。完成されたのは、昭和四十七年で、六十七歳の時であった。五年半の歳月を要された。谷崎源氏の、準備に二年、執筆に三年より少し長い。

その間に右眼を、終えられた翌年には左眼を、網膜剝離で手術され、八十一歳でなくなる時は、ほとんど視力を失っていた。源氏物語が円地さんの両眼を奪ったともいえよう。

円地さんは御自分の訳を、人の愛し方にたとえられ、床の間にそっと大切におく愛し方と、略奪結婚があるとすれば、自分の訳はその略奪結婚に及ぶ愛し方だといいきっておられる。筆のおもむくままに加筆もある円地源氏は、訳というより小説円地源氏ともいべきもので、はじめて源氏物語に入っていくには最も入りやすい訳といえるだろう。

桐壺きりつぼいじめ

学校でのいじめの問題が社会的に扱われて、論議されている。なぜそんなことが起こるのか、なぜいじめられる子が出来るのか、教育者や社会評論家のお歴々が、様々な意見を発表されているが、いつの時代どこの国でも、人間のいるところ、多かれ少なかれ、いじめっ子といじめられる子というものはあって、大人の社会にだって、それは引きつづいていいる現象だった。今ほど陰湿でなかっただけで、私の子供の頃だって、やっぱりあった。勉強の出来る出来ないは問題でなく、何となく強い子供がいて、勢力を持ち、その子に抗うといじめられるので、みんなが機嫌をとっていた。

機嫌をとるような気の回らないおっとりしたおとなしい子がいじめの対象になった。その他に先生の御ひいきの子供というのが必ずいて、その子もいじめの対象になった。成績がいいなら仕方がないが、何となく可愛らしい顔をして、素直で、家庭環境もよくて、などという子は、先生が可愛いと思うらしい。

それは、ひいきにされない子たちにとっては目障りしやぐで、実に癪しやぐに障るのだ。遊びの仲間外れにしたり、その子の椅子の上に汚いものを置いたり、持ち物をかくしたりする。そしてわざと聞こえよがしに、「ひいき、ひいき」とかげ口をいう。

源氏物語の冒頭の桐壺きりつぼの巻を読んだら、誰だって何となく思い当たる節があつてくすぐったいの

ではないだろうか。五十四帖という長い小説の最初の部分なのだから、大河小説の発端としての重みが必要なところである。私たち小説家にとっては、書きだしの数行が決まったらもうその小説の大体の出来工合はわかってくる。手応えというのが実作者にはあるものだ。

源氏物語は、はじめに桐壺の巻を書いたのではなく、途中で評判がよくなったので長篇の形にして、後にこの書きだしがつけられたという説もある。すべて学者や研究家の推定で、作者の執筆日記が残されているわけでもないから、本当のところはわからない。まあ素直に冒頭から読んで、この大河小説の中に流され、まきこまれていくのも悪くない。

古典を愛し、古典にいれあげて、広く深く読みこなし、しっかりと噛みくだき食べてしまって、自分の血や肉にしてしまった女流作家に田辺聖子たなべせいこさんがいる。おそらく当代女流の中では田辺さんほど古典を読みこんでいる人はいないだろう。その田辺さんにも源氏物語を現代語訳ではなく、すっかり自分のものとして食べてしまった後で、改めて、繭糸まゆいとを吐き出すようにして織りあげた『新源氏物語』という大作がある。これは源氏を下じきにした田辺さんの全く新しい小説とっていいだろう。面白さでは円地源氏よりずっと這入りはいいやすい。その中で、田辺さんは、ばっさり桐壺の巻を切り捨ててしまって、いきなり読者を、十七歳の恋多き貴公子として光源氏と逢あわせてしまう。そのほうがいきいきした物語の息吹の中へ入っていかれるという見解である。たしかにそれも一つの見識であるし、実作者らしい自信の程でもある。

私は何となく悠長なこの桐壺の巻がそれほど退屈に思えない。歌舞伎の舞台の、それこそ間のび